特別インタビュー

ぼくの映画と まち 人びと 暮らし

まちが失ったもの　取り戻したいもの

映画監督　山田洋次

——山田さんは寅さんシリーズもそうですが一貫して庶民とか下町の人びとの暮らしと人情をテーマとされています。

山田　ぼくは旧満州育ちですから日本の古い暮らしを余り知らなかったのです。ラジオで落語を聞いて内地には長屋という住まいがあって、八つぁんや熊さん、隠居さんのような面白い人たちがいるんだなと外国のことのように想像していたのですね。戦後引き揚げて来て、学生時代はとげぬき地蔵や庚申塚のある巣鴨に下宿しました。とげぬき地蔵にはテキ屋さんが毎日でていたし、落語で学んだ下町の暮らしが広がっていて、ラーメン屋に元気なおねえさんがいたり、八百屋には田舎から出てきたまじめな少年が働いていたり、民衆の暮らしがぷんぷんと匂っていました。そこから都電で大学に通い、のちには大船の松竹の撮影所に通いながら、ぼくはこんなまちに住む人たちが登場する映画を撮らなければならない、そのためには下町に住まなければならないと強く思っていたのです。

——映画って所詮人間とその暮らしを撮るのですからね。

山田　そうです。王子に国鉄の労働者のOBが建てた家があって、その二階に友人と間借りしたこともありました。トイレには階下の女の子が寝ている部屋を通らなければ行けない（笑）。子だくさんだったから朝のトイレは大混乱。その体験が最初の監督作品『二階の他人』になりました。

——住宅難がテーマで、当時はだれもが身近かで切実な問題でした。

山田　結婚しても間借り暮らしでした。たまたま団地の募集に当選したのです。競争率が高かったので嬉しかったですよ。入学試験の合格と同じようにその時のことはいまもはっきり覚えています（笑）。祖師谷大蔵の団地、麦畑の向こうにぎらっと四階建ての白いビルが並んでいて、下町の商店や人がいっぱいの町からこんな淋しいところにきて、ぼくの創造は大丈夫かなと悩みました。1DKでしたが風呂があり、水洗トイレもある（笑）。

——山田さんはその頃の2作目の映画『下町の太陽』で、若い主人公に公団住宅へのあこがれをしゃべらせています。

山田　この団地で二人のこどもを育てましたが、あの頃の住民はいい住環境を自分たちの力でつくるのだという気概があって、早速自治会をつくってさまざまな課題に取り組み、保育所要求も実現しました。民主主義の教育をまじめに受けた若い父親や母親のぼくたちはパワーがありましたね。

——自治の基本があったのですね。あの頃は日本全体が将来は明るい光に溢れていると思っていました。

山田　団地の暮らしは快適でした。最近祖師谷団地に行ってみたら、半世紀近く経って、当時小さかった樹が亭亭とそびえる大木になっていてとてもいい感じでした。こどもたちが遊んだ広場もそのまま、しみじみ懐かしい思いでしたが、悲しいかな今はこどもはほとんどいないし、高齢のかたが所在なげに散歩してました。今思えばあの頃の身の丈にあったサイズ、ほどよいレベルの暮らしをどうしてずっと保てなかったのか、そうしていれば日本はもっと経済的にも充実し、みんながほどほどの幸せを持ち続けられたのではないかと思います。あの団地暮らしのモデルを捨てた頃から日本は道を間違えたのではないか。国を挙げて持ち家をすすめ、家は庭つきでもっと広く、便利にとなり、その結果、都市は広がり、土地は高騰し、自然は消滅し、電車は混み、道路は渋滞するということになった。ゴールのない競争でくたびれ果て、バブルの崩壊でボロボロに傷ついたのではないでしょうか。

——都市や人間の論理から、産業や経済の論理が優先され、国の政策がその方向を目指し、国民もそれをよしとしたのですね。山田さんは映画の『家族』や『故郷』のなかでそんな時代の流れに対し暗黙の抗議をされています。

山田　予測できなかったのですね。限りない成長には破綻があることや、高齢化や少子化も。今は反省の時期でしょうね。あの頃の団地のように、一軒一軒の家は狭くても、みんなで寛げる緑や水の空間を共有すればいいのです。昔の団地は緑の空間がたっぷりありましたが、いまの高層デラックスマンションは、冷暖房やセキュリティは完備していても、広場のような空間は少なくて近所づきあいもないはずです。

——日本にも集まって住むという都市文化は成熟していて、京都の町家、大阪の長屋もそうですし、東京の下町でも基本は長屋暮らしでした。

山田　そこに暮らす人々の間に約束事があった。落語家の故林家三平さんの奥さんでぼくが尊敬している海老名香葉子さんは戦前の長屋育ちですが、お父さんが釣りの竿師だったそうです。釣り竿の先の部分は繊細な仕事になるので、こどもたちは近所の寝たきりのおばあさんの家に行かされる、枕元でおままごとしたりお手玉したり、夕方になるとごはんだよってお母さんが呼びにくる、そうするとおばあさんは新聞紙をおひねりにしてお菓子を入れ、来てくれてありがとうよ、とこどもたちを送りだしてくれたそうです。昔の人はえらいなと思いますね。近所同士の思いやりを約束事としてシステム化していた。ぼくだって老後寝たきりになったら、高級老人ホームで四六時中テレビを見て暮らすより、近所のこどもたちがワイワイ遊びにきてくれる方がどれだけ嬉しいか知れません。

——知恵と人情が地域にはりめぐらされているまちこそですね。

山田　詩人の故田村隆一さんも下町育ちですが、町というのは住民が三代続くと成立すると言ってました。空間や建物だけでなく、50年60年という時間が必要。お前のおばあさんは昔きれいだったんだよといった会話が住民の間に成り立たなければならないというのです。これも海老名さんの話ですが、ご主人の三平さんが亡くなって暫く、地元の鳶の親方が毎晩顔をだしてくれて、どうしてるんだ、なにか用はないかと声をかけてくれたそうです。昔の鳶の親方は地域住民の暮らしを知りつくしていたんですね。

——一番の安心はそういうあたたかい地域社会です。今まちの暮らしの大きな問題は、かつてヨコに密接に連なっていた家と暮らしと人の関係が、無機的にタテに積み重なるを得ない状況になったことです。

山田　阪神・淡路大震災のあと、復興住宅というんですか、安全な高層の建物ができ、お年寄りの動きを見張る装置も整備されましたが、被害の大きかった長田のまちの人たちが失ったのは、近所と往き来する狭い路地だとか、昔から行きつけの小さな店なんですね。それは復旧しなかった、住民はバラバラになってしまって、孤独死といった痛ましいことが起こっています。正直に生き、税金を払い、悪いことをしなかった人がです。こんなむごいことが何故起きるかについて、実は国を挙げて考えなければならない課題だと思うのです。

——安全であっても安心ではない。まちづくりには法があって、例えば耐震耐火の堅牢な建物、消防車が通れる広い直線道路です。

山田　そう、つい最近まで劇場や映画館では非常灯の点灯が義務づけられていました。映画祭に来る外国の映画人から、こんな明るいホールで映画を見なくてはならないのかと抗議されましてね。最近はようやくその規制がゆるめられましたが。

——住宅やまちの問題もやはり文化の問題なのでしょう。

山田　売家とか貸家の広告には、もっぱら家の広さと間取りとかが書いてありますね。しかし住環境にとって本当に大切なのは地域です。どんな町か、ご近所仲良くしているのか、どんな店が近くにあるか、それらが暮らしの快適さを左右するのです。戦時中の隣組は民衆弾圧のシステムでしたが、これからの暮らしには、地域や隣近所のコミュニケーションの再生が必要でしょうね。日本人のまちの生活文化、近隣社会のしくみは何百年もの時間をかけて築いてきたものですから、しっかりと見直し評価すべきだと思います。

——まちのコンビニも深夜若者のたまり場になっているという批判から、いやいや危ない時に逃げ込めるところという意見もあります。

山田　若者のたまり場があっていいんですよ。大人が眉をひそめるようなことを通過して、こどもは社会を学び大人になるんです。俗と悪のないまちは、まちといえないかも知れません。

——これからのまちはどう考え、つくっていけばいいのでしょうか。

山田　寅さんの舞台になった柴又の帝釈天の参道ですが、夜は早く店を閉めます。けれども柴又駅を降りて家路につく勤め人はみんなシャッターの降りたこの通りを歩く。それは店は閉まっていても、その裏や二階に店の人たちが暮らしているからなんです。つまり人の気配があって安心なのですね。まちの暮らしは個人商店があって成り立つ。生活に必要な“物”を買うだけでなく、“心”のやりとりもできるからです。まちから“豆腐屋さんや八百屋さんが消えてしまって量販店ばかりになったら、ぼくたちの暮らしはどうなるんでしょうね。

いまも下町の風情を残している巣鴨の商店街

けやきの樹が大空に伸びている祖師谷大蔵団地のいま

かつて　こどもたちの歓声が響いていた公園

戦後の住宅難がテーマの悲喜劇『二階の他人』〈1961・松竹（株）〉

主人公は郊外のニュータウン生活に憧れる
『下町の太陽』〈1963・松竹（株）〉

九州から北海道へ夢を託す一家の長い旅
『家族』〈1970・松竹（株）〉

生業（なりわい）を捨てさせられ造船所勤務に
『故郷』〈1972・松竹（株）〉

シリーズは48本『男はつらいよ　知床慕情』〈1987・松竹（株）〉

山田　洋次
やまだ　ようじ

1931年大阪生まれ。幼少時を中国東北部（旧満州）で過ごし、1947年に日本に引き揚げる。1955年松竹大船撮影所に入社。以後、2000年にこの撮影所が歴史を閉じるその年まで、この場所で映画を製作する。

主な作品として『男はつらいよ』シリーズの他、『馬鹿まるだし』『家族』『幸福の黄色いハンカチ』『学校』シリーズ、『たそがれ清兵衛』など。最新作は、藤沢周平原作の時代劇『隠し剣　鬼の爪』。